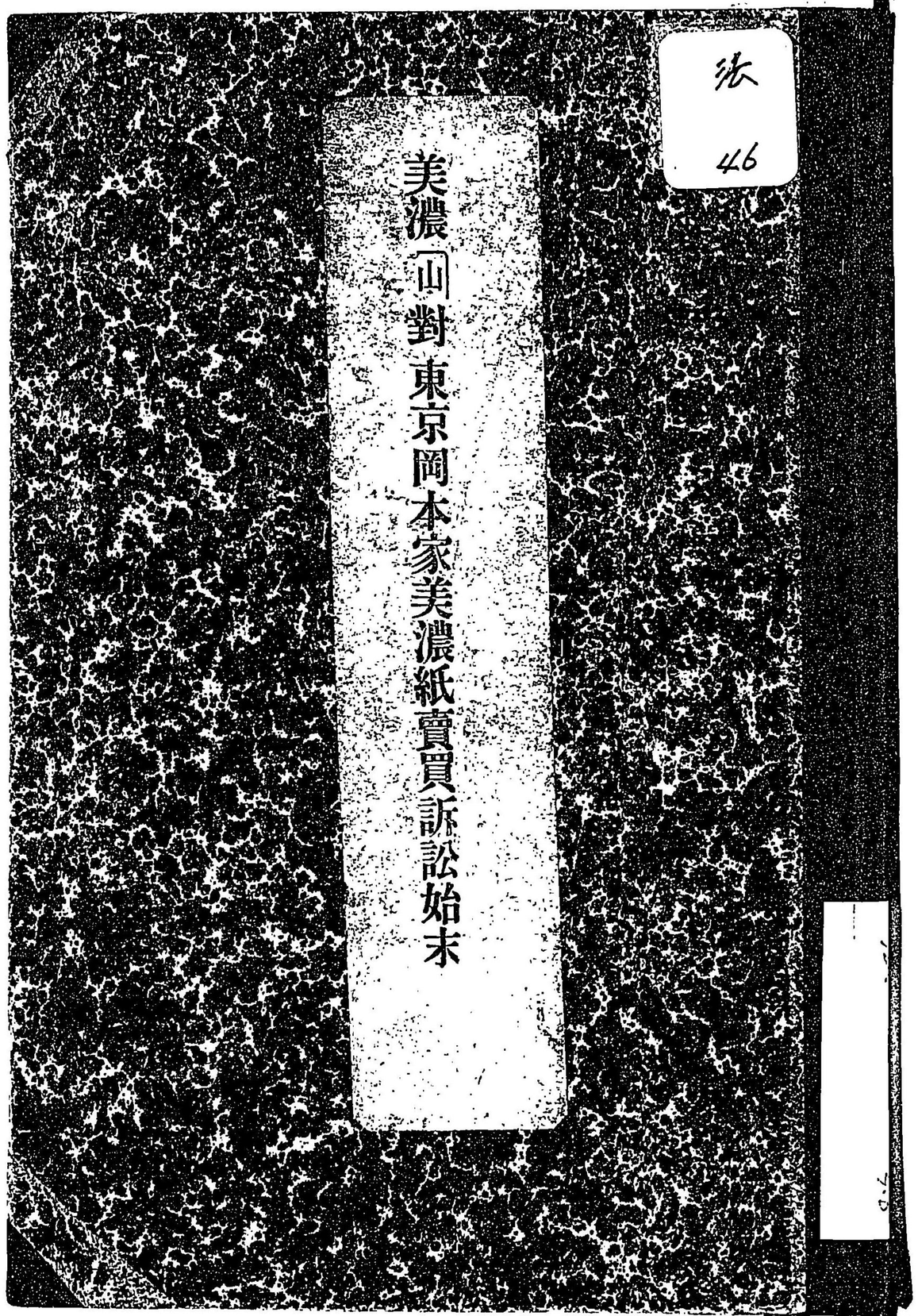


法
46

301022－000－6

法－46

美濃山對東京岡本家美濃紙賣買訴訟始末

房村八十吉／編

M25. 12

BBS－0001

法-46

No 1852/XXV

紙賣買訴訟の始末

岐阜縣美濃國武儀郡乾村大字船越三十二番戸平民紙商

原告　山口平兵衛

東京市本所區松坂町一丁目四番地平民紙問屋

被告　岡本彌兵衛

明治二十五年一月廿日

明治二十五年一月廿日

明治二十五年一月廿日

右兩商店の間に起れる美濃紙賣買取引に起因せる一場の行違遂に左記の如き結果を呈するに際會し信用と誠實とに是れ因れる商家の禁物たる法廷沙汰とはなりぬ其是非曲直は始ち人間社會に於ける一大不吉の出來事たるは不肖八十吉の苦々しき思ひ出に依て事件の概略を記述し之れを從來取引の諸大家諸舗の間に頒ち一世に公にせんが為め其始末を略叙する左の如し

第一回訴訟の顛末

一原告山口平兵衛代人山田判左衛門は明治二十三年一月中被告岡本家に係り生漉書院百狀入百七十九を明治二十二年五月五日預け置きたるに付之れを引渡すか否らざれば其見積代金壹千五百六十七圓九拾五錢の金額を引渡すへき樣說諭ありたしとて東京本所區裁判所に勸解を出願したり然れども前記の物品は既に仕切計算相濟みたる

事實なるに付岡本家に於ては斷然原告の請求を拒絶したり原告は同年二月中預け紙取戻しの訴と題し東京始審裁判所に向つて民事訴訟を提起したるに明治二十三年四月十二日を以て同裁判所は原告の請求を至當とし被告岡本家は原告の請求通り物件又は金額及訴訟入費をも併せて完濟すへき義務ありとて被告敗訴の裁判言渡を受けたり其始審裁判言渡書は左の如し

明治廿三年始第百八十二號

裁判言渡書

原告岐阜縣美濃國武儀郡乾村大字船越三十二番戸平民
紙商業　山口平兵衛

右代人同縣同國山縣郡高木村百四十七番戸平民農業
當時東京府下日本橋區殼売町二丁目二番地小森トキ
方止宿　山田判左衛門

被告東京府本所區松坂町一丁目三番地平民紙商業
岡本彌兵衛

右山口平兵衛ヨリ岡本彌兵衛ニ對スル預ケ紙取戻訴訟ヲ審理スルニ原告代人陳述ノ要旨ハ原告ハ明治二十年十一月以后仝廿二年三月中迄被告ト紙取引中被告ヘ送リタル美濃紙ノ内不向ノ品アリシニ付キ甲第一號證ノ如ク百七十九ノ紙ハ被告方ヘ預ケ品トナシタリ其際原告ニ金融ヲ爲スノ必要アリシヲ以テ預證書ノ宛名ハ平光茂兵衛ト爲セリ然ルニ其後原告ハ右茂兵衛ヘ右預ケ紙ヲ抵當トシ借受シタル金圓ヲ甲第三號證ノ如ク返濟シ甲第二號證ノ如ク茂兵衛ヨリ甲第一號證預リ證ヲ引繼キ預ケ紙受取リノ權ヲ原告ヘ取戻セリ右ニ付預ケ紙引渡シヲ被告ニ請求スルモ被告ハ之ニ應セサルニ付キ右引渡ヲ訟求スト云フニ在リ且又該紙被告ノ手許ニ存セサルニ於テハ其代金一千五百六拾七圓九拾五錢ノ支拂ヲ受ケ度シト陳述セリ被告代人答辯ノ要旨ハ明治二十二年五月中甲第一號證ヲ原告ヘ交付セシハ原告ヨリ積付相成リタル紙ノ内百七十九ハ不向ニ付キ至急相場仕切難カリシニ依リ一時原告金融ノ爲メ之ヲ交付セシモノニシテ其後相場折合ヒ該預リ證ノ物品ヘ對シ代金相渡シタリ然ルニ原告ハ其預リ證ノ其手中ニ存シ居ルヲ僥倖トシテ本訴ヲ提起シタルモノナレハ其請求ハ不當ナリト云フニ在リ

右代人同府同番地平民右雇人　田中八十吉

依テ各證憑ヲ審閲シ説明スル左ノ如シ

甲第一號證ヲ閲スルニ被告ハ請求次第其預リ居ル殘百七十九ヲ該預リ證引換ヘニ引渡スヘキ旨ヲ約束セリ而シテ該證ハ被告ニ於テ原告ノ金融ノ爲メニ原告ヨリ預リタル紙ニ對シ被告ヨリ之ヲ原告ヘ交付シタルコトハ被告ニ於テモ之ヲ認ムル處ナリ去レハ該證被告ノ手ニ歸セサル間ハ被告ハ原告ヨリ該證記載ノ紙ヲ預リ居ルモノタルヿ明了ナリ然リ而シテ甲第二號證甲第三號證共被告ニ於テ之ヲ認メ居リ甲第一號證ノ名宛ハ平光茂兵衛ニ於テ原告ニ該號證記載ノ紙ヲ引渡シ更ニ異議無キ旨明カナル以上ハ被告ハ原告ノ請求次第右紙ヲ引渡スノ義務アルモノトス

被告ニ於テハ其後該紙ハ仕切相成リタル旨抗辯スレ共乙第一乃至第三號證ノ金圓ハ本訴紙ニ對シ仕拂ヒタルモノト認ムル由無キヲ以テ其抗辯相立チ難シ

本訴紙ニ對スル見積代金ニ關シテハ被告ニ於テ別段ノ異議ヲ申立テサルニ由リ該紙ヲ被告ニ於テ現有セサルニ於テハ原告ノ請求通リ被告ハ其見積代金ヲ支拂フヘキモノトス

右ノ理由ナルニ由リ判決スル左ノ如シ

被告ハ本訴生漉書院百狀入百七十九ノ預リ品ヲ原告ヘ返戻スヘシ若シ其物品現存セサルニ於テハ其代金一千五百六拾七圓九拾五錢ヲ原告ヘ支拂フヘシ

訴訟入費ハ被告ノ負擔タルヘシ

明治二十三年四月十二日東京始審裁判所公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡ス者也

判事試補　小出鉚太郎

裁判所書記　長谷川直太郎

右謄本也

明治二十三年五月九日

裁判所書記　長谷川直太郎

一右の判決を聞くや岡本家の驚愕一方ならず事實に反する意外の裁判なりとて到底默視すべからずと思考し豫ねて紙賣買取引に付事實幷に習慣に通曉せる聞へある代言人野口本之助先生に控訴見込の有無に付審査鑑定あらんことを依頼せしかば同先生は日を期し其見込充分なる旨の鑑定意見を明示したり爰に於て愈々控訴して始審裁判の取消を求むることに一決し明治二十三年六月十一日東京控訴院に控訴したり同院に於ては判事柳田直平氏外四判事の係にて審理完了の末左の第二審裁判を言渡し爲めに岡本家の申立正當にして被控訴人山口平兵衛代人の陳述其當を得さりしことゝなれり其判決文は左の如し

明治二十三年第五百四十六號

裁判言渡書

控訴人東京府東京市本所區松坂町壹丁目三番地平民紙商

代言人同府京橋區宗十郎町廿一番地寄留埼玉縣平民　岡本彌兵衛

被控訴人岐阜縣美濃國武儀郡乾村大字船越三拾二番戸　野口本之助

代人同縣同國山縣郡高木村百四十七番戸平民農業　山口平兵衛

山田判左衛門

右山口平兵衛ヨリ岡本彌兵衛ニ係ル預ケ紙取戻訴訟事件ニ對シ明治廿三年四月十二日東京始審裁判所カ言渡シタル裁判ニ服セス岡本彌兵衛ヨリ扣訴ヲ爲シタルニ付之カ審理ヲ遂クル處兩造陳述ノ要領左ノ如シ

扣訴代言人陳述ノ要旨ハ扣訴人ハ年來ノ紙問屋營業者ニシテ被扣訴人トノ取引モ亦數年以來ノ事ニ係レリ而シテ決算未濟ノ分ハ明治廿年九月以來同廿二年五月迄ノ間ニシテ其間ニ被扣訴人ヨリ扣訴人ヘ積付ケ扣訴人ニ於テ受領シタル總紙數ハ千二百七十三丸ニシテ被扣訴人モ認ムル處ナリ亦之ニ對シ扣訴人ヨリ被扣訴人ヘ支拂ヒタル金額及ヒ前々決算ノ殘額等ニ對シテハ被扣訴人ニ異議ナキノミナラス反テ被扣訴人カ自ラ受取リタリト述ル處ノ金額ハ扣訴人ヨリ渡シタリト云フ處ノ金額ニ三圓ノ超過ヲ爲スニ至レリ以上ノ順序ニ因テ扣訴人カ計算セシ處ニ據レハ扣訴人ヨリ被扣訴人ヘ尚支拂フヘキ金高ハ僅ニ一百九圓餘トナレリ又扣訴人ハ被控訴人ノ依頼ニ依リ被控訴人ヘ金融ノ爲メ甲第一號證ヲ被控訴人ニ交付シタルニ相違ナシ然レ𪜈被控訴人カ甲第一號證ヲ抵當トシテ平光茂兵衛ヨリ借受ケタル金額ハ既ニ完濟シタリトハ被控訴人自陳ノ事實ナレハ今更前々ヨリ繼續シタル計算ヲ度外ニ付シ單ニ甲第一號證ニ基キ其預ケ紙ヲ要求スルハ甚タ不當ナリト思料ス因テ原裁判取消ノ上被控訴人ノ請求ヲ全部排斥アリタシト云フニ在リ

被控訴代人陳述ノ要旨ハ被控訴人ハ甲第一號證ノ通リ紙百七十九ヲ特別ニ控訴人ヘ預ケ其預ケ證即チ甲第一號證ヲ抵當トシ平光茂兵衛ヨリ金千二百圓ヲ借リ入レ其後明治廿二年八月六日ニ至リ平光茂兵衛ヘハ借金元利ヲ返辨シ甲第一號證ヲ被控訴人手元ヘ取戻シ隨テ其紙取戻權ヲ被控訴人ヘ取戻シタルモノナレハ控訴人ニ於テ此請求ヲ拒ムノ謂ハレナキモノニシテ原裁判ハ相當ナリト思料ス因テ全部認可アリタシト云フニ在リ

依テ各證據ヲ閲シ双方ノ辨論ヲ聽キ説明スル左ノ如シ

夫レ控訴人被控訴人間數年來紙取引ノアリタル事實ハ両造ノ爭ハサル處ニシテ其受授ノ紙數及金員ノ額ニ至リテモ亦爭ナキ處ナリ然ルニ被控訴人ハ甲第一號證ヲ平光

茂兵衛ヨリ被控訴人ニ於テ取戻シタル故其預リ紙ハ特別ノモノトシテ單ニ之ヲ控訴人ヨリ取戻スノ權利アルモノナリト主張スルニアレ𪜈甲第一號證ハ控訴人ヨリ平光茂兵衛ニ宛テタル預リ證ナルヲ以テ若シ茂兵衛ヨリ控訴人ニ係リ單ニ預ケ紙取戻シヲ請求セシ場合ニ在リテハ或ハ控訴人ニ於テ繼續取引云々ノ口實ヲ以テ其請求ヲ拒ム能ハサルノ理ナキニシモアラサレ𪜈甲第一號證ノ抵當義務ヲ既ニ滌除シテ被控訴人ノ手裏ニ歸セシ今日ニ在リテハ舊來ノ繼續取引ニ關スル計算ヲ拒絶シ單ニ甲第一號證ノ紙ノミヲ取戻サントスルノ請求ハ不當ナリトス然リ而シテ控訴人ハ本訴ニ於テ總計算ヲ爲サンコトヲ希望セシヲ以テ當院ニ於テ更ニ被扣訴人ニ對シ其計算ヲ命セシモ拒ンテ之ニ應サル故計算上ノ結局ニ付テハ茲ニ説明及裁判ヲ與ヘス

右ノ理由ニ基キ原裁判言渡ノ全部ヲ取消シ更ニ裁判スル左ノ如シ

繼續取引ノ總計算ヲ爲サスシテ單ニ第一號證記載ノ紙ノミヲ取戻サントスル被扣訴人ノ請求ハ相立タス

第一審第二審共訴訟入費ハ總テ被扣訴人ノ負担タルヘシ

明治廿三年十一月廿八日東京扣訴院公廷ニ於テ第二審裁判ヲ言渡ス者也

民部第四部　判事　柳田直平

東京扣訴院

同　北條元利
同　高野孟矩
同　廣瀬義輗
同　伊藤種基
書記　青木重彦

右正本ニ依リ謄寫ス

東京扣訴院

明治廿三年十二月三日

東京扣訴院書記　菊池武一㊞

前記ノ謄本ハ民事訴訟法第五百十七條ノ正本トシテ原告山口平兵衛ニ對シ强制執行ノ爲メ被告岡本彌兵衛ニ之ヲ附與ス

明治廿五年一月廿五日

東京地方裁判所

裁判所書記　吉田春吉㊞

右の敗訴裁判を受けたる被控訴人山口平兵衛は別に大審院に上告をも爲さず空しく上告期限を經過したり然るに明治二十三年十二月三十日に至り代言人栗本政次郎先

生に依頼し精算請求並に預け紙取戻しの訴と題する第二回の訴訟を新たに提起し來りたり

第二回訴訟の顛末

一第二回訴訟の起因は前に陳へたる如くなるも其第一回の時と異れる要點は前の爭點は前掲判決書詳記の如くなるも後の爭點は精算請求となん云へる一問題あるに付法廷の審理は頗ふる錯雜を極むることゝなり先つ其一事を擧ぐれば被告岡本家の代言人より東京巳卯組紙問屋取引の實際を證言せしめんか爲め府下に老舗の聞へ高き同業者深山小兵衛小津清左衛門大橋清左衛門吉田嘉助石崎藤助西島みつ大畠多右衛門の七氏を證人として取調べあらんことを係判事に請願し判事は右七氏の中深山大畠の兩氏を喚問し判決の材料を得たりと認められ遂に左の裁判を言渡し全く被告岡本家の勝訴となれり而して其判決書は左の如し

二四(ヲ)第一號

判決正本

原告　岐阜縣美濃國武儀郡乾村大字船越三十貳番戸平民紙商　山口平兵衛

右訴訟代理人

被告　東京府武藏國東京市本所區松坂町一丁目三番地平民紙商　栗本政次郎　岡本彌兵衛

右訴訟代理人　野口本之助

右當事者間之精算請求幷ニ預紙取戻事件ニ付當地方裁判所ハ判決スルヿ左ノ如シ

原告請求スル美濃紙百七拾九若クハ其代金ノ請求ハ相立ス依テ原告ハ被告ノ認諾スル紙代殘金百九圓三拾七錢八厘ヲ受取ル可シ

被告ハ右殘金ヲ原告ニ償却スヘシ

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事實

原告事實上陳述ノ要旨ハ明治廿年四月以來同廿二年五月廿八日ニ至ル間被告ニ甲第六號證ノ如ク美濃紙壹千貳百七拾三九ヲ委托販賣セシメタル處被告ハ右美濃紙ノ内甲第五號證ノ品ハ不向ナリトテ一旦謝絶セラレタルモ其内大書物拾九薄書院壹九千金貳拾九丸ハ遂ニ被告ノ手ニ於テ賣捌キ殘百七拾九原告ニ受取ルヿトナリ甲第一號證ヲ受領セリ依テ今般右百七拾九ノ返還ト併セテ右美濃紙總代金ノ精算ヲ訴求シ其殘金ノ償却

ヲ受ケ度且ツ原告カ精算スル處ニ依レハ右百七拾丸ヲ除キ其差直總計金壹万千貳百七拾四圓七拾貳錢五厘ニシテ内金時々ニ壹萬〇五百九拾貳圓ヲ受取リタルヲ以テ殘額金六百八拾貳圓七拾貳錢五厘トナリ其内被告カ請求スル運賃口錢郵便書留メ料金五百八拾壹圓貳拾貳錢壹厘ヲ扣除シ殘額金百壹圓五拾錢四厘之レ即チ紙代殘金ニシテ之レニ右百七拾丸ノ現品若クハ其見積價額金壹千五百六拾七圓九拾五錢ノ償却ヲ要ムル次第ニシテ其他被告カ主張スル本訴取引價額及ヒ内金ニ對スル利息ノ請求ハ原告ノ承認セサル處ナリト云フニ在リ

被告事實上陳述ノ要旨ハ其受取リタル美濃紙ノ總數及ヒ内渡金額等ハ共ニ原告云フ如クナレ𪜈本訴仕切總代金ハ右百七拾丸ヲ加ヘ金一萬千四百九拾壹圓四拾錢ニシテ原告云フ如キモノニ非ラス又原告ハ右百七拾丸ノ現品若クハ其代價ヲ特別ニ訴求スルモ右ハ漸次被告ノ手ニ於テ賣捌キ其代金ノ幾部モ内金トシテ原告ニ交付シアル次第ナレハ今特ニ此請求ヲ爲スハ不法ナリ元來原告ハ差直ヲ以テ本訴ノ代金ト爲スモ斯ル商慣習ノアルヘキ筈ナク總テ代金ハ時價ニ依リ被告等ノ如キ問屋ニ於テ之レヲ定メ來リタルヿハ同業者一般ノ慣行ナレハ之亦原告ノ訴求ハ不法ナリ故ニ被告ハ右仕切代金ノ内𪜈リ内渡金及ヒ口錢金四百零貳圓拾九錢八厘運賃百七拾八圓七拾四錢三厘及ヒ内金ニ對スル利子金貳百拾壹圓七拾八錢郵便書留メ料金貳拾八錢ヲ差引殘額百九圓三拾七錢八厘ハ直チニ償却スルモ本訴ノ如キ多額ノ要求ニハ應シ難ク而メ原告ハ内金ニ對スル利子ヲ認メサルモ乙第三十三號證ニ依レハ内金百圓ニ對シ金貳圓ノ利子ヲ付スルハ當然ナルヲ以テ飽迄之レカ差引ヲ求ムト云フニ在リ

以上ノ事實ヲ立證スル爲メ原告ハ甲第一號乃至第十一號證ヲ提出シ被告ハ乙第一號乃至第三十三號證ヲ提出ス

理由

本件所爭ノ要點ハ第一原告ノ差直又ハ被告ノ仕切價額ニ依リ其代金ヲ定ム可キモノナルヤ第二内金ニ對シ利息ヲ付スヘキモノナルヤ如何ンニ在ルモノトス因テ第一點ヲ案スルニ原告ハ差直ニ據ルヘキモノナリト云ヒ被告ハ仕切價格ニ據ル可キモノナリト云フモ共ニ確的ナル證據ニ基キ爭フモノニ非ラス故ニ如此場合ニ於テハ之レ等商業家ノ慣行ニ徵シ之レヲ査定セサル可カラス依テ其慣行ノ有無ヲ證言ニ徵スルニ各證人ニ於テ差直ヲ以テ直チニ代價ト爲スノ商習慣アリシト證言スルモノナリ反ツテ總テノ證人ハ差直ト時價トニ比シ大差アラサル時ニ於テハ專ラ問屋ノ仕切價額ニ依リ定ム可キ從來ノ慣行ナリシト證言スルニ據レハ兎モ角差直ニ據ルヘキモノニアラスシテ或ル場合ニ於テハ問屋ノ仕切價格ニ據ル可キモノナルヿ明カナリ然リ而メ今被告カ仕切リタリト云フ代價ヲ鑑定人ノ評價額ニ對スルニ悉ク時價ニ接近シ其間大差ナク之レニ反シ原

告差直ノ如キ高價額ヲ當時ノ時價ニ於テ曾テ現出シタルヿアラサレハ被告ノ仕切價額ハ毫モ越權不法ニ出テ之ヲ定メタルモノニ非ラスト認メ得ラルレハ本訴ノ代價ハ被告ノ仕切價額ニ依ル可キヲ以テ至當トス殊ニ原告ハ差直ニ據ル可キモノナリト主張シナカラ原告ヨリ送リタル乙第二十九號第三十號證積付ケ書ノ如キ毫モ差直ノ記入アラサルモノアレハ必ラス差直ニ依ル可キモノナリトノ申供ハ信用スルヿ能ハサルモノトス故ニ此點ニ對スル原告ノ申供ハ採用セス

前説明ノ如ク被告ノ仕切價格ニ依ル可キモノナリト斷定シタル以上ハ原告ノ特ニ返還ヲ求ムル百七拾九ノ美濃紙ハ疾ニ被告ニ於テ賣捌キ其代金ノ幾部ヲ內金トシテ原告カ受取リアルヿ計算上明カナルヲ以テ之レ亦其請求ハ不法ナルモノトス何トナレハ本訴紙代金ハ右百七拾九ヲ加ヘ合計金壹萬千四百九拾壹圓四拾錢ニシテ此內金トシテ金壹萬五百八拾九圓ヲ受取リ且ツ運賃等ヲ仕拂フヿハ原告ノ爭ハサル所ナレハ其殘金ハ實ニ少額ニシテ尙ホ壹千五百餘圓ノ價額アリト云フ右百七拾九ノ美濃紙被告方ニ現存ス可キ道理アル可カラサルヲ以テナリ

第二點ヲ案スルニ原告ハ內金ニ對シ利息ヲ付スヘキモノニアラスト云フモ仕切勘定ヲ爲サヽル間ニ於テ荷主カ其內金ノ幾部ヲ問屋ヨリ受取ルヿハ恰モ其荷物ヲ抵當トナシ負債ヲ爲シタルモノト一般ナルヲ以テ其負債ニ對シ利子ノ生スルハ當然ナルモノトス

今當事者ヨリ其差出シタル明細表ニ依ルニ仕切勘定ヲ爲ス以前ニ於テ原告カ被告ヨリ內金ヲ受取リタルヿ明カナレハ其受取リタル內金壹萬五百八十九圓ニ對シ利子ヲ付スルハ原告ニ於テ當然負擔ス可キ義務ナリトス然リ而メ乙第三十三號證已卯組紙問屋設立組合規約第十九條ニ依レハ內金百圓ニ付金貳圓ノ利子ヲ付ス可キ旨ノ明記アリ又證言ニ徵スルモ其期間ノ長短ヲ問ハス問屋ヨリ荷主ヘ內金ヲ渡シタルヿハ金百圓ニ付金貳圓ノ割合ヲ以テ利子ヲ貰ヒ受ケルノ仕來リナリト明言シ其割合ニ於テモ敢テ過當ノモノニアラサレハ旁此營業者ナル原告ニシテ特リ該慣行ノ範圍ヲ免脫セントスルハ穩當ナラサルモノト認ムルヲ以テ被告ノ請求スル利子ハ原告ニ於テ償却ス可キ義務アルモノト認定ス

右ノ理由ニシテ被告ノ抗辯ハ總テ相當ナルモノト認ムルヲ以テ原告ハ被告カ自認スル本訴紙代殘金百九圓參拾七錢八厘以外ニ於テハ毫モ訴求ス可キ權利アラサルモノト判決ス

東京地方裁判所民事第五部

裁判長　判事　松野爲美

判事　牧山榮樹

明治廿四年十一月三十日

右原本ニ依リ此正本ヲ作ル者也

明治廿四年十二月十四日

東京地方裁判所

書記　廣田精一郎

判事田代律雄

十六

一右の判決後山口平兵衛は代言人栗本政次郎代言人法學士高橋捨六兩先生に依頼し明治二十五年一月中東京控訴院に前記判決不服の控訴を爲したり然るに同院は民事第二部裁判長判事長谷川喬氏外四判事の係にて頗ぶる鄭重なる手續にて事實習慣の如何をも調査せられ控訴人の請求に依り召喚したる鑑定人石崎寛祐氏外四氏の鑑定意見書をも參考に供せられ審理周到の末明治廿五年五月三日第二審判決を宣告せられ又被控訴人岡本家の全勝なる結果となれり其判文左の如し

二五(ヲ)第一四號

判決正本

岐阜縣美濃國武儀郡乾村大字船越三十二番戸平民紙商

扣訴人　山口平兵衛

東京府東京市神田區錦町三丁目廿五番地寄留代言人

右訴訟代理人　栗本政次郎

仝府仝市仝區今川小路二丁目十四番地

仝　高橋捨六

仝府仝市本所區松坂町一丁目三番地平民紙商

被扣訴人　岡本彌兵衛

東京府東京市京橋區宗十郎町廿一番地

右訴訟代理人　野口本之助

右當事者間ノ明治廿五年子第十四號精算請求預紙取戻控訴事件ニ付判決スルヿ如左

判決主文

控訴ヲ棄却ス

控訴訟費用ハ控訴人ニ於テ負擔ス可シ

事實及爭點

事實及爭點ハ前判決書ニ記載スル所ニ同シ而シテ控訴人ハ前判決ノ全部ニ對シ控訴ヲ爲シ新ニ甲第十二號乃至十四號證ヲ提出シ被控訴人ハ控訴ノ棄却ヲ請求セリ

理由

本案ヲ斷ズルニハ紙代金差引殘額ノ幾何ナルヤヲ定ムルヲ要ス即チ控訴人申立ノ如ク百七十九ノ代金ヲ取除クモ尚百一圓餘トナル可キ計算ナルヤ又ハ被控訴人ノ答辯ノ如ク百七十九ノ代金ヲ加ヘテ初メテ百九圓餘トナル可キ計算ナルヤヲ判定セザル可ラズ抑モ差引殘額ニ付キ此ノ如キ差違ヲ生ズルハ控訴人ニ於テハ送荷物ニ明示シタル指直ニ依リ又其指直ナキモノハ自己ノ信憑スル價額ニ依リテ計算シ被控訴人ニ於テハ一ニ其仕切直ニ依リテ計算シタルニ因ルモノナルヲ以テ爰ニ之カ計算ノ方法即チ孰レノ價額ヲ標準トス可キモノナルヤヲ定メサル可ラス

被控訴人ニ於テハ各取引先ニ對シテハ毎年二回即チ三月ト九月トノ二期ニ於テ計算ヲ遂ケ各帳簿ニ照合シタル上之カ仕切書ヲ作リ特ニ割印ヲ押捺シ以テ之ヲ取引先ニ送付スベキ慣例ニシテ則チ控訴人ニ對シテハ乙第二十一號乃至二十三號證ノ如ク明治廿一年三月同年九月及ヒ二十二年三月ニ於テ之レガ計算ヲ遂ケ其都度仕切書ヲ交付セシモノナリ故ニ該證書ニハ現ニ其仕切書ニ符合ス可キ割印アル旨ヲ述ヘリ抑モ該證書ハ被控訴人自己ノ商業帳簿ニシテ直チニ之ヲ完全ナル證據トスルヲ得スト雖モ證人太田勝次郎ノ申立ニ依レハ同人ニ於テモ毎年二期ニ精算ヲ遂ク可キ慣例ナル旨ヲ述ヘ加之年餘ノ久シキ一モ計算ヲ遂ケザルガ如キハ商人相互ノ取引ニ於テ通例有ル間敷事ナルヲ以テ扣訴人ト被扣訴人トノ間ニ於ケル明治廿二年三月以前ノ取引於テハ乙第廿一號乃至第廿三號證ノ如ク既ニ計算ヲ遂ケ扣訴人ニ於テモ亦異議ヲ留メザリシモノト認メザルヲ得ス

明治廿二年三月以前ノ取引ハ右ノ如ク毎期精算ヲ遂ケタルモノトスル上ハ扣訴人ニ於テハ其取引ニ於ケル紙代ハ常ニ被控訴人ノ仕切直ニ因リタルヿヲ認諾セシモノト看做サヽルヲ得ス而シテ以前ノ取引ニ付既ニ仕切直ニ因ルヲ認メタル上ハ其以后ノ取引ニ付テモ亦以テ同一ノ推測ヲ下スヿヲ得ヘキカ故ニ其仕切直ノ不當ナラサルニ於テハ扣訴人ニ於テ之ニ從ハサルヲ得ザル者トス今此仕切直ノ當否ヲ審案スルニ此仕切直タル固ヨリ指直ト符合セスト雖モ各證人ノ申立ニ依レバ時宜ニ依リ指定以下ニ於テ賣捌ク可キ慣例アルヿ明瞭ニシテ唯其ノ如何ナル範圍ニ止マル可キヤヲ確認スルヲ得サルニ過キス故ニ明治廿二年三月以前ニ於ケル兩造間ノ取引ニ於テ生シタル指直ト仕切直トノ差額ヲ以テ其以后ニ於ケルモノニ比スレバ其割合殆ント同一ナルノミナラズ證人太田勝次郎ノ申立ニ依レハ明治廿二年中已卯組ナル紙問屋ヨリ東京商工會ヘ差出シタル月報ニ依リ取調ヘタル美濃紙代金ノ平均相場ハ九圓廿六錢ナリトノ事ニテ之ヲ右ノ仕切直平均額ニ對照スレバ却テ高價ナル割合ナルガ故ニ該仕切直ハ則チ之ヲ相當ナリト認定スルニ足レリ故ニ控訴人ニ於テハ此代價ニ付テモ亦異議ヲ述フルヿヲ得ザルモノトス

甲第一號證ニ依レハ百七十九ノ紙ハ全ク預ケ品ノ如シト雖モ抑モ甲第一號證ノ成立ハ乙第三十一號證ニ起因セルモノナルハ控訴人ノ認ムル所ニシテ同證ニ依レハ「荷物ハ入用無之候得共云々トアルヲ以テ其實被控訴人ニ於テ賣捌クヿヲ得ベキモノタルヲ知ルベシ加之之ヲ賣捌キタル點ニ付テハ控訴人ニ於テモ別段異議ナキ所ナルヲ以テ其代價ニ付テハ從來ノ取引ニ依リ定アリタル方法即チ前項ノ如ク仕切直ニ依リ取極ムヿ可キモノト認メサルヲ得ス故ニ此代價ニ付テモ前項ノ如ク全ク被控訴人ノ計算ニ因ラサルヲ得サルモノトス

又控訴人ニ於テハ內金ニ對シテ利子ヲ付スルヿヲ拒ムト雖モ乙第三十三號證ナル己卯組ノ規定ニ於テ各問屋ハ內金ニ付利子ヲ受取ルヲ得可キ旨ヲ規定シ而ノ證人數名ニ於テモ該規定ニ從ヒ孰レモ利金ヲ受取リ來リタル旨ヲ述ベ加之明治廿二年三月以前ノ取引ニ付テモ現ニ利子ヲ積算セシ例證アルヲ以テ假令第三者ガ偶々控訴人ヨリ利子ヲ受取ラサリシ者アリトスルモ此カ爲メ被扣訴人ニ對シテ利子ノ支拂ヲ拒ムヿヲ得ザルモノトス以上ノ理由ナルヲ以テ紙代差引殘額ハ被扣訴人申立ヲ以テ正當ナリトス故ニ原裁判所カ扣訴人ノ請求ヲ排斥シ單ニ被扣訴人ノ認諾スル金額ノミヲ受取ル可キモノト判定セシハ固ニ其當ヲ得タルモノトス依テ民事訴訟法第四百二十四條ニ依リ扣訴ヲ棄却ス可キモノナリ

東京扣訴院民事第二部

裁判長　判事　谷川喬
判事　高谷恒太郎
判事　廣瀨毅
判事　平田小三郎
判事　前田孝階

原本ニ依リ正本ヲ作ルモノナリ
明治廿五年五月三日

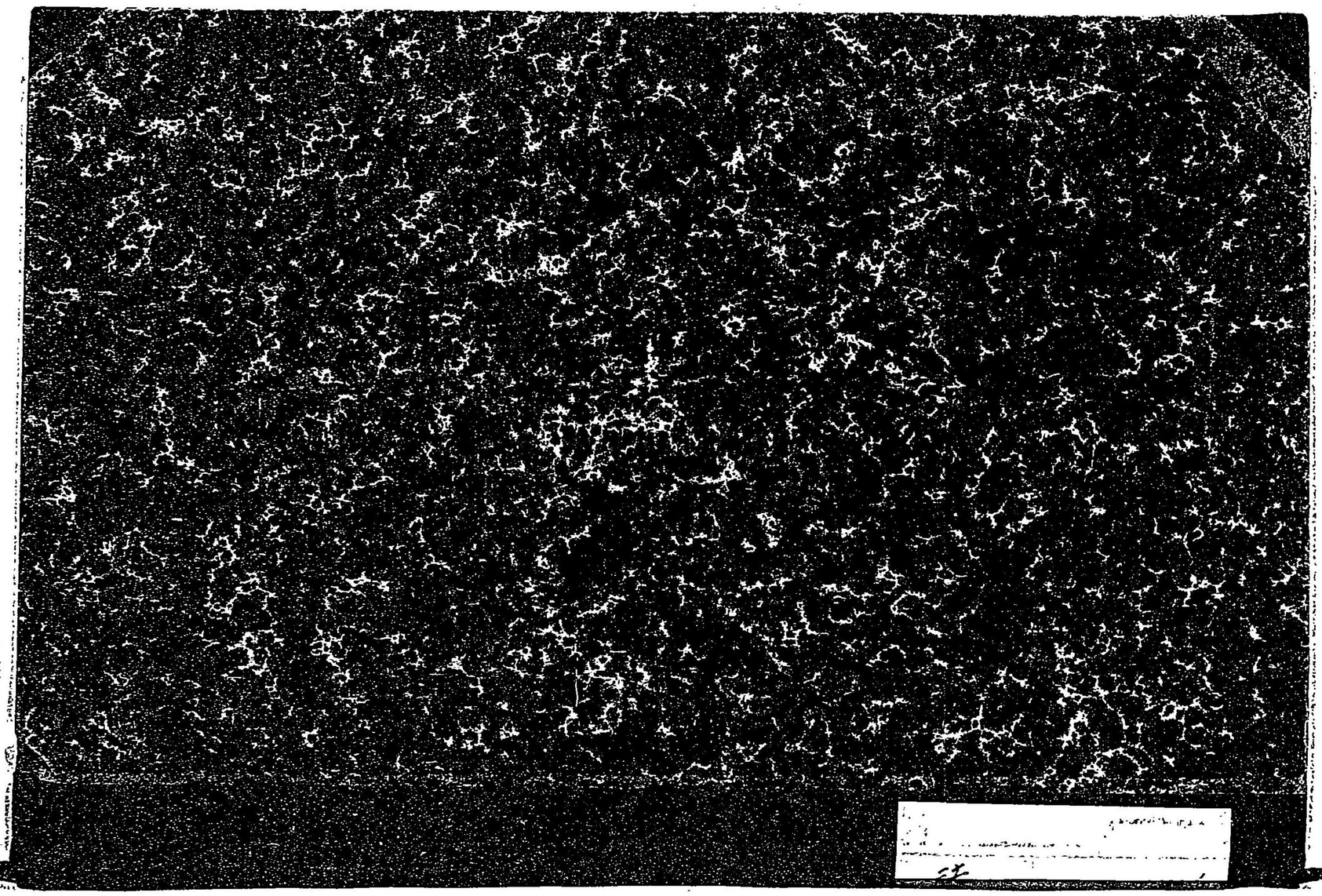
東京扣訴院
裁判所書記　磯部榮太郎印

右の第二審判決を受くるや山口平兵衛は更に服從の念なき由にて傳聞する處に依れば法學士代言人鈴木充美先生の法律事務所に依頼し大審院に上告したりとの趣なるも同院は本年九月中右上告は其理由なきものと判決し該上告事件棄却の裁判を宣告し本件も是れにて最終確定の極に達し岡本家の申立始終法廷の採用する處となり茲に始めて明治二十三年より同二十五年に渉れる訴訟事件も全く大段落を告げ岡本家幷に永く同家の恩澤に浴せる不肖八十吉も大に安堵の思を爲し愁眉稍開けたるは一

は岡本家商業取引の誠實なるに由るべく又代言人野口本之助先生の紙問屋間取引の實際に通曉せる能力を以て丁寧親切なる取扱に依りしものと思考せらるゝまゝ茲に此の始末を略記し本件に付種々御心配下されし諸君幷に取引先諸君樣方より相變らず倍舊の御愛顧あらんことを祈らんが爲め活版の便を借り此小冊子とせし譯に御座候(完)

明治二十五年十二月五日印刷
明治二十五年十二月五日出版御届

東京市日本橋區小網仲町二番地
平民紙商(舊岡本家雇人田中事改)
著者兼發行者　房村八十吉

仝　市京橋區瀧山町七番地
瀧關舍
印刷者　島田用定

法
46